

永田町新潮流 平沢勝栄

俺がやらねば



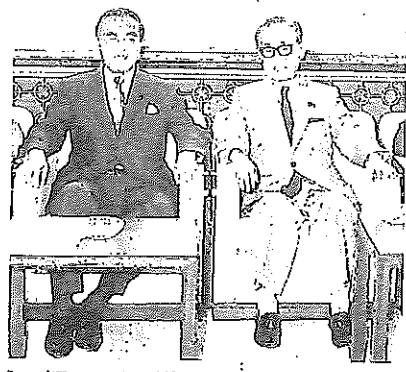
中曽根康弘元首相が死去した。また1つの時代が終わったといえる。

中曽根内閣当時の官房長官は後藤田正晴氏だ。同氏は「戦争を知らない政治家が増えたら心配だ」が口癖だった。そして、自衛隊の海外派遣などに極めて慎重だった。

中曽根氏はその後藤田氏と安全保障などで考え方が違っていた。

それでも、中曽根氏は後藤田氏を官房長官に起用した。私は中曽根氏に「なぜ、使いたくない後藤田氏を起用したのか」と聞いたことがある。

中曽根氏の答えは「後藤田さんなら役人を使いこなせるし、大震災などの危機管理ができる。自分に諫言



中曽根氏(左)と後藤田氏のタッグで国鉄の民営化などが実現した

もしてくれろ」とのことだった。

中曽根内閣は難しいところを越え、大震災などの危機管理ができた。これも、中曽根

氏と後藤田氏の連携プレーの結果だといえよう。中曽根氏は「情報を収集し、分析し、そして活用できる独自の情報機関を日本は持つべきだ」というのが持論だった。

外国情報機関の幹部から、活動状況などを聞いて

桜引く国会は…いかなるものか

私は首相秘書官とともに同席させていた。中曽根氏は徹底があるが、中曽根氏は徹底的な質問攻めで、少しでも何かを学ぼうという熱意がありありとかがえた。

間違いない、中曽根氏は常に国家を考える憂国の士だった。またまた活躍してもらいたかっただけに遊去は残念でならない。

先月は、新聞に小さく元自治相の白川勝彦君の訃報

もあつた。私は白川君と知り合つて55年以上になる。大学ではクラスも寮も同じだった。

お互い田舎から丸坊主で東京に出てきたこともあつて、奇妙にウマがあつた。彼は正義感と行動力に満ちあふれていた。そして、理想に向かつて一直線に突っ走っていくタイプだった。彼の政治家人生の最後は新党をつくるなど、やも脱線気味だったが、全力投球を続けてきて疲れたことと

死後は故郷に帰りたいと思つた。

中曽根氏は常に国家を考える憂国の士だった

(自民党衆院議員)